

被災地発 「あの日」から1年

東日本大震災

東日本大震災から1年、復興の遅れや抜本的な解決策のない放射能汚染など、被災地では今も問題が山積している。被災した人たちは、どのような思いで過ごしてきたのか。岩手・宮城・福島各県の3人の歯科医師に語ってもらった。



福島第一原発事故が起こり、私の診療所は一変した。従業員は5人全員避難し、私一人が残って



門真 みい子 もんま歯科医院 (福島県南相馬市)

生きて廃炉を見届けたい

25年以上にわたって右腕として支えてくれた歯科衛生士、出産後も働き続けてくれたスタッフ……。気心の知れた仲間間に囲まれ、仕事をしていた1年前を思い出すと、やり切れない。診療所は、原発から北へ約25kmの南相馬市原町に、原発事故に対する悔しさが込み上げてくる。3月19日に会津若松市に移ったが、被災地で活動する歯科医師の姿を見て、4月から避難所への訪問を始めた。なじみの患者さんの「いつから診療始めるの?」という声で再開を決意。5月9日から一人て診療を続けて



吉田 裕 たかた歯科医院 (岩手県陸前高田市)

人生で一番長い1年

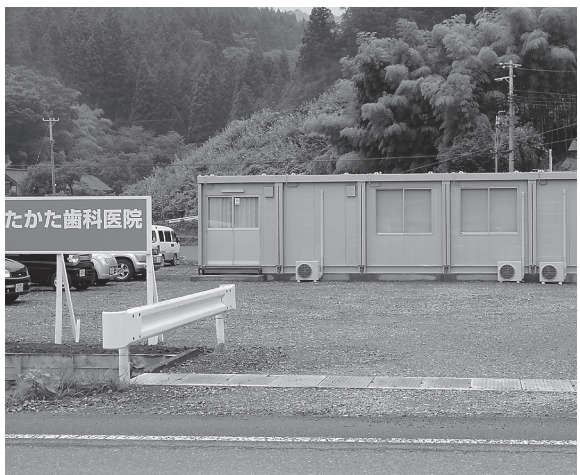
「先生、生きていてくれてありがとうございます。プレハブで診療を再開した日、患者さんから告げられた言葉だ。岩手県陸前高田市で開業して25年、大津波ですべてを失ったが、私にはこの街しかない。待っていてくれた患者さんのおかげで、力を尽くしたいと思っ

大災害の発生に備えよう



鈴木 章則 かいほく歯科クリニック (宮城県石巻市)

「あの日」から1年が経つ。私は宮城県石巻市に住んでいる。石巻市は、東日本大震災で死亡・行方不明が約4千人と被災した市町村で最大の犠牲者を出した。津波とその後火災で全焼した門脇(かどのわき)小学校や、児童の7割が犠牲になった大川小学校など、甚大な被害のため何人も全国放送されており、ご記憶の方も多いと思う。私の医院でも津波のため、ユニットやレントゲン、パソコン、コンプレッサー、バキュームなど全滅し、復旧には多大の労力と費用を要した。また、数千枚のカルテが水に濡れ、後片付けが大変だった。



2011年8月に完成したプレハブの仮設診療所

2月末が期限だった被災者への医療費免除措置は、保険協会などの署名活動のおかげで延長さ

タートできていないから。250人が犠牲になった気仙町は、更地のままで復興の息吹を感じられない。復興には、生活の再建が不可欠。医療機関への補助拡大と共に、すべての業種が再開できるように、国や自治体は早急に支援すべきだ。私自身、いまだに診療所と自宅の再建のめどが立っていない。希望が見えないなかでも、家族と患者さんに支えられて過ごした1年が、たった1年だと感じている。